



南高 Forever

File011 01.2022

小林 幸子 氏

同窓生
南幌高校事務生

人の心をひらく

“あいさつ”の魔法

本校に来校された方が最初に顔を出される窓口。そこには小林さんのステキな笑顔と挨拶があります。お越しになられた方からも、南幌高校の事務室は対応がよいとお褒めの言葉をよくいただきました。

本校を卒業されてから長く本校の顔として勤務いただき、おそらく閉校まで見届けていただくことになるであろう小林さんのお話を伺いました。

ちょうど本校の全日制普通科一期生となる学年だった小林さんは、地元から離れる必要性も感じなかったことから本校を受験されたそうです。受験当日は友人のお姉さんから「大丈夫だよ。合格できるよ。」と声をかけていただいたことで安心して受験できたことを覚えておられるそうです。

高校時代はバレーボール部に所属し、練習に励んで

おられました。ご本人は下手ながら続けてきたとおっしゃっていました。顧問の先生から「サーブが上手だ」とほめられたことがうれしく、今も趣味でバレーボールを続ける原動力となっています。メンバーにも恵まれ、大会で負けて悔しい思いをしても、「でも楽しかったね。またがんばろう！」と言いたいあえるステキな仲間に出会えました。

また、ご自身では意識されていなかったのですが、本校で勤務するようになったとき、同僚となったかつての恩師が「板目の中のゴミまではき出す掃除の仕方が良かった」と言われていたことを聞かされ、学校の先生はいろいろな場面を見ていてくれることに驚かれました。

卒業間近の昭和五三年一月に本校が道立移管され、四月から事務生が必要であ



り、地元にずっといられる仕事と聞き、面接。卒業後は本校事務生として勤務されることになりました。

当初、事務生の仕事は、電話・来客の対応、事務職員や教職員からの依頼などが、徐々に自分なりに考えて積極的に仕事に取り組むようになり、計画的に処理できるようになりました。

生徒の細部まで見て指導する先生たちのお手伝いができるばと考え、体育大会では教職員チームの一員として、学校祭の教職員演劇では演者の一員として参加されたり、遅刻してきた生徒が遅刻届をもらうときに一言添えてみたり、生徒とのつながりを意識して働いてこられました。

しつけの厳しかったお父様からご自宅にいられていた来客にちゃんとあいさつをするよう幼いころからしつけられたこともあり、小林さんは外部に文書を届けに行くときも「こんにちは。南幌高校です。」などと真っ先に名乗るなど、気持ちのこもった「あいさつ」に心がけておられます。

ただ通り一遍のあいさつをするのではなく、来客の方がどのような用件で来校されているかを察して、ときには明るく、ときには落

ちついた感じで声のトーンを変えてみたりしているとのこと。

本校へ来られる方の中には恥ずかしそうにあいさつをされる方もいたそうですが、気持ちのこもったあいさつを続けることで、しっかり目を見てあいさつを返してくれるようになるなど、あいさつが人の心をひらくことに役立っていることを実感されておられます。

〈南高生への伝言〉

わたしが日々心がけているのは「あいさつ」です。これは簡単なようで難しいかもしれません。時と場合に応じて声のトーンを変えたり、動作を加えたりして相手に不快な思いをさせないよう心がけています。

あいさつをされて不快に思う人はいないはず。社会に出る前に学校で声を出してみてください。

なんでもそうですが、やらなければならぬからやるという義務感でイヤイヤやっていることは相手に確実に伝わってしまします。

小林さんのあいさつは事務生としてしなければならぬことではありませんが、そこを一步進め、あいさつをされる人の気持ちに立つた心のこもったあいさつです。

やらなければならぬことに心をこめることは、与えられた仕事に命を吹き込むことです。

仕事は自分を幸せにくれるのではなく、自分自身が仕事に命を吹き込むことで、誰かの役に立ち、「ありがとう」をいただくことで、自分が幸せになっていく。

「凡事徹底」という言葉もあります。改めて小さな事であっても心を込めることが大切だと思えました。